

BANTOU 番頭の時代

第一部 カリスマを支える

昭和48年の創業前から人はまるで「親分と子分」のように、行動を共にしてきた。出会いは日本電産社長の永守重信が斉藤機器メーカー「テイクナー」に入社し、モーター設計を手がけていた昭和40年代のはじめだ。

永守が卒業した職業訓練大（現・職業能力開発総合大学校）の後輩だった小部博志（現副社長）が、同じ下宿先に住む水守にあいさつに行き、すると永守はいきなりこう言った。

「子分としてやる」
親分肌の永守はその言葉通り、日本電産の創業時、有無を言わず小部を入社させた。生え抜きの小部は、いまや同社になくてはならない「大番頭」だ。

真夜中、学生だった小部に水守が「ビールを買ってきて

40年来の「子分」はトップの分身

番頭の敵え

番頭は攻守のバランス極めよ

「BANTOU」は経営マネジメ N T O U も、強い攻撃力を持つベント力現場を統率する人間力。そして、社長に忠誠を誓った小部氏も、時には強い攻撃力を発揮して社長のすべてを兼ね備えている必要がある。同時に、社長が暴走した場合、真っ先にブレーキ役を果たさなければならぬ。守るだけでなく「BA」

（ヒスグロー代表 杉村知哉）

其の六 ▶▶▶ 日本電産の「補佐役」たち ①

「くれ」と頼んだことがある。自製販売機もコンプレックスもない時代だ。こんな時間に解いている酒屋はありません」という小部に水守は命じた。

「駅前のクラブなら開いている。そこで買ってください」
水守は「その当時から私の教育は始まっていた」と振り返る。

日本電産の創業後も小部は、水守の無理な注文に振り回された。日本電産が飛躍するきっかけとなった米国スリーエムとの取引。水守はモーターの性能を変えずに、大きさは半分にするという、どう考えても無理な注文を引き受けてきた。

手に余る要求に、やる気も失った小部もいた。それでも水守は「できるまでやる」と繰り返した。学生時代から真面目を受けていた小部は、どんなむちやでも水守が言うなら何とかなる、という信頼感があった。注文通りのモーターが完成したのはわずか半年後だった。

「自分が社長になったら、

お前を副社長にするわ」
創業時に水守が約束した通り、小部は平成12年4月、副社長に就任した。現在、取締役会を任じるのは小部の役割だ。

関係者は、水守さんと似ていて、取締役会ではスバズバと厳しい指摘をしている」と打ち明ける。まるで、水守がもう一人いるように感じるところ。

会社の規模が拡大し、トップの力が薄々まで届きにくくなる中で、トップの考えを熟知し、本人に代わって、分身のように会社を動かす。小部の番頭としての真骨頂がある。

「次、社長やるか？」と水守から尋ねられたとき、小部はきっぱりと断った。
「私は番頭です」
水守は、小部の答えに満足そうに笑顔を見せた。
「番頭がトップ狙ったらあかんがな。あくまでトップを支えるわけや。野心もったらあかん」
（敬称略）

3面に続く

BANTOU 番頭の時代

「親分」の背中を守る「後ろの目」

1面から続く

平成17年、日本電産の関連会社の社員による不祥事(ワンマン経営者である水守は、ややもすれば社内でも問題になった)通常なら当然、解雇処分だ。しかし、社長の水守重信は問題の社員に以前から目をかけていた。解雇の跡目切りがつかない永守に、副社長の小部博志は迫った。

「一度特例を作っても組織の規律は保てない。学生時代から常に頭が上がりなかつた。親分」に対する謙言は、小部の覚悟の表れた。それが会社のたるべき永守には印象に残っている。小部の言葉がある。

「お前なんかいらん」と辞めたら困るのはあなたで、言ったとき、小部に「私が、すま」と言われ、ハツとし

た」と取り返す。

水守は会社を成長させるため、人前でも容赦なく社員を怒鳴りつけてきた。叱責のフックスを大層に送りつけることもあった。耐えきれず、会社を去つていく人間も少なくない。

その小部も65歳になつた。平日は本社がある東京都で過半の生活を10年以上続

けているが、最近では休日にも孫の顔を見るのを楽しみにしているという。



48年	日本電産を設立
63年	大塚2部、京都証券取引所に上場
7年	兵庫マシナリとシボ工業に資本参加
9年	トヨタに資本参加
	リードエレクトロニクスに資本参加
10年	コパル、コパル電子に資本参加
	東京1部に上場、大塚1部に指定株主
13年	ニューヨーク証券取引所に上場
15年	三菱精機製作所に資本参加
18年	フランスのヴェレオから車載モーター事業を買収
19年	日本サーボに資本参加
21年	日本電産テクノモーターホールディングスを設立
22年	米アマゾンエレクトロニクスからモーター事業を買収
	日本電産サーボを完全子会社化
23年	三洋植毛を買収
24年	イタリアのASIを買収
	米アプロシオオートメーションを買収
	日本電産サンキョーを完全子会社化
	米キネテックを買収
25年	日本電産コバル、日本電産トヨタを完全子会社化
26年	三菱マテリアルシーエムアイを買収
	ホンダエニシスを買収
	日本電産コバル電子、日本電産リードを完全子会社化

「人材もなかなか優秀な者がいる。皆さんに不安を

示していく。永守は番頭

とての番頭を擁護して

「じゃないですか」と次期社長の条件を語る。水守自身、若いときから競馬に行くときは必ず一番のけた指に靴を入れ、列車の指定席も番号は一番を避

「100年企業」に成長させるといふ永守の思

いは強らいでない。

日本電産に残る課題は永守にとつての「小部」にある

存在だ。次代を肩担えた新

たな番頭をどう獲得し、育

成するか。番頭の存在が、

世代交代の成否を握る。

(敬称略)